

目 次

0.

I.

II.

III.

IV.

V.

VI.

VII.

VIII.

IX.

X. 補論：二つの例題への適用 63

あとがき 79

X. 補論：二つの例題への適用

(a) 「ポパーの三世界論」批判

科学哲学（科学論）に一石を投じて重要な貢献をした K. ポパーは、その著書『客観的知識』において、世界または宇宙を三つに区別できると論じた。第一は、物理的対象または物理的状態の世界、第二は、意識の状態・心的状態または行動性向の世界、第三は、思考のとりわけ科学および詩的思考と芸術作品から成る客観的内容の世界である。この把握の仕方は、ポパー自身も言うように、プラトンのイデア論あるいはヘーゲルの客観的精神論と多くの共通点をもつ。

第一と第二の世界はデカルトが出発点に設定する物事の「二つの元」に対応するが、その「二元」に世界という概念まで付加されている。ポパーはさらに、「第三の世界が存在すると信じる」と言う。そして、第三世界の最重要な住人は、批判的討論と討論の状態および雑誌・書物・叢書の内容だ、と主張する。この表現には、第三世界が客観的に存在することを主張しようとする意図が潜んでいる。

第三世界が独立的に存在することを立論するために、三つのテーゼが提出される。そこでは次のような思考実験が行なわれ、— 研究のすべての手段（第一世界に属する）とその用法についての主観的知識（第二世界に属する）とが破壊されても、諸々の蔵書（第三世界に属する）とそれから学習

するわれわれの能力は生き残る。さらに、すべての蔵書が破壊されると、われわれの文明は数千年間再現できない（ここには、人類が生き残れば数千年後には文明が再現される可能性が示唆されている） — と論定して、第三世界の実在性・意義・自律性が主張される。結局、客観的知識は「認識者のいない知識」として存在すると論定されるのである。第二のテーゼでは、その客観的知識は大幅に自律的な発展をすることが強調され、第三のテーゼでは、第三世界を研究する客観主義的認識論は、主観的意識の第二世界を明らかにするのをとおいに助けることができるが、その逆はないとして、第三世界は独立的な存在とする考えを補強する。

三つの主要テーゼに三つの援助テーゼが添えられる。その第一は、第三世界はクモの巣に比較しうる人間的動物の自然的産物であるとして、客観的な存在物という考えを補強しようとしている。第二は、自律的という言葉を強調しているが、わたしには、第二テーゼ以上の内容を含むとは思われない。第三の援助テーゼは、客観的知識が成長するのはわれわれ自身と第三世界との相互作用を通じてであり、知識の成長と生物学的成長とのあいだに密接な類似性があるとして、客観的知識が、進化してきた生物と同様に客観的存在であることを主張しようとする。

ポパーの「三世界論」を受けいれることができるだろうか。その理論は、彼が科学哲学で提起したように検証に耐えるほ

ど強固な論拠にもとづいて組み立てられているだろうか。上で要約した三つの主要テーゼと三つの援助テーゼは、反証を退けるほど強固な論拠になっているだろうか、カントの批判の流儀で考察しよう。

ポパーの思考実験は、自然科学的な知識を根拠にして行なわれている。「文明は数千年のあいだ再現できないだろう」という言葉は、人類史についての知識に基づいているが、自然科学的な知識に基づけば、人類史は進化論的な生物史に連結しており、生物史は宇宙史に連結している。ポパーは、進化論を承認しているし、世界を宇宙と言い換えるのだから宇宙史も承認している、つまり、現代の自然科学的な知識を客観的知識として承認しているのである。

ところで、ポパーは、宇宙という言葉の世界という言葉を使い換えたもののように使っており、世界を問題にする哲学の場では、第一世界に属する宇宙はすでに事実存在するとするほかない。それに対して、生命以前にはなかったはずの客観的知識は、歴史的にある時点から出現したのであり、常在する（始まりと終わりを識ることのできない）宇宙の存在とは異質のあり方をするものである。それなのにポパーは、存在という言葉、並列的に扱えない異質なものに無理やり適用している。

第二テーゼは客観的知識が自律的な発展をすることを挙

げて、客観的な存在であることを主張するのであるが、他方で、すべての蔵書が破壊されると文明は数千年間再現できないとされる。なぜ再現できないかを考えてみれば、それは、認識者である人間が客観的知識を活用できないからである。しかも、数千年という言葉は文明が再現される可能性を示唆するのであるが、再現されるとすれば、認識者が客観的知識を活用するようになるからだろう。客観的知識が自律的な発展をするためには、認識者である人間が不可欠なのである。客観的知識は、自存して自律するのではなく、人間存在に依存して拡大するのである。そういう「知識」を実体的な存在と言うことはできない。知識は、人間存在に附属する働きと言うべきである。

第三テーゼは、第三世界を研究する客観主義的認識論が主観的意識の第二世界を（とりわけ科学者の主観的思考過程を）明らかにするのをおおいに助けることができるが、その逆はないとして、第三世界が独立的な存在とする考えを補強しようとする。ところが、この文章は、認識者つまり人間が認識の主体であることをあいまいにしている。科学者の思考を助けるのは何よりも科学者の内部にある精神的働きであること、科学者の精神的働きによってもたらされる客観的知識は、現代に近づくほど重要になったが本質的には精神的働きを助ける情報にすぎないことを無視している。

三つの援助テーゼについても考えよう。援助テーゼ第一は、

「第三世界はクモの巣に比較しうる人間的動物の自然的産物、つまり客観的な存在物」と主張する。われわれは、はかないクモの巣よりも堅固な金石、有用な知識を刻んであるがその言語を理解する人間がすでにいない金石文を、引き合いに出すことができる（エジプトの遺跡で見つかった解読される前の神聖文字を思い出そう）。その金石文は長いあいだ認識者のいない知識すなわち解読できない情報にすぎなかったが、人類が減びるときには、情報を刻んだ自然物となる。逆に、古代に長く安定して存在した湖の底に堆積した地層は、長い年代にわたるその土地の気候などの自然条件を記した情報だが、その情報は、それを活用することのできる認識者がいれば、立派な知識である。また、実際に電波で宇宙に送り出されたメッセージを挙げることもできる。二進法の数列で書かれた一つの知識は、認識者が存在するという情報を伝達しようとしている。ここでは、知識が情報となっている。つまり、人間が知識と認定するものは本質的に〈情報→知識→情報〉なのである。

これらの情報あるいは知識を記録した自然物は、物質的な存在である宇宙に属する。そして、物質的な宇宙が世界に存在すること、また、その世界に人間が存在して、世界を認識する活動をするに認めることに異論をとない人はいないだろう。しかし、認識活動によって獲得した知識が物質的に記録されたら、その記録された知識がもう一つの世界を成すと言うのは、世界という概念の乱用である。

叡智をもって生物を見つめれば、生物の DNA に書かれた情報は客観的知識と呼んでさしつかえないことが判る。人間は、脳を煩わせて改めて認識活動をするまでもなく、自身もつ DNA に記録されて客観化された情報＝知識を直接読みとって、自己の身心を成長修復維持することができる。塩基の配列としてある DNA は、内部情報もろとも宇宙につまりこの世界に属す。湖底の地層や DNA などの情報を認識者が解読しつまり知識にして、認識者に判読できる記号を用いて情報化し物に記録したら、それは格別の客観的知識で、もう一つの別の世界にあると見立てるのは、超越のための階梯としてしか役立たない。

補助テーゼ第二は、結局、主要な第二テーゼと同じことを繰り返している。補助テーゼ第三は、「客観的知識が成長するのはわれわれ自身と第三世界との相互作用を通じてであり、知識の成長と生物学的成長とのあいだには密接な類似性がある」と主張する。この補助テーゼ第三は、帰納法は決定的な命題に到達できないと主張したポパーとは思えないほど、第三世界のテーゼへ導く力のない根拠である。

人類もその一員である生物が進化するのとは、物質的な存在である自然との物質的な相互作用を通してであり、客観的な知識は、世界内存在である人間が認識者として世界内に存在する物質的なものと相互作用を通じてその働きを認識することによって得られる。すなわち、第一世界に存在するわれ

われが、われわれの機能的な働き（その心的状態をポパーは第二世界と呼ぶ）によって客観的知識を獲得するのである。そこで獲得された知識を別格のものとして第三世界と呼ぶのはやはり度が過ぎている。

どう考えても、客観的知識は、自存して自律的に拡大していく知識ではない。ところが、著書『客観的知識』第三章のタイトルを「認識主体なき認識論」としたポパーは、「認識者のいない知識」を自律的に存在する「第三世界」と見る構想のまま突っ走る。そうして、第四章では、客観的知識を「客観的精神」と言い換えて飛躍する。

人間の精神が認識活動をする働きであることは否定しようがないのに、その「精神」に「客観的」という言葉をかぶせて、精神を客観的な存在物であるかのように高みに上げる。この段階にくと、〈客観的知識→客観的精神〉は、ポパーがすでに導入部で予告したようにプラトンのイデアあるいはヘーゲルの理念と同類となり、カントが超越的理念と呼ぶものになる。ここには理性の超越がある。

ポパーが基礎にすえようとした三つのテーゼと三つの援助テーゼは、無矛盾で十分強固なものとは言えず、ニュートンの「プリンシピア」が先頭に置いた公理の役目を果たせない。それなのに、そこから三世界論を展開したために、理性の超越を押しとどめることができず、超越的理性観念に超え出たのである。あるいは、出発点にすでに超越的理念がまぎ

れこんでいたのだ。そこから、自己無撞着な認識論の体系を組み立てることはできなかったのである。

ポパーも信頼する自然科学の確実な知識にもう一度立ちもどってみよう。自然科学的知識は認識者なしに宇宙が存在したと主張する。現代では、認識者のいない時代からあった宇宙について、人間の認識活動が絶えず確実で客観的な知識を拡大しつつある。その知識は、宇宙にいつの時点かに生物が出現し、生物進化の途上で人類が出現した、つまり、宇宙は、存在物がその形態を質的に変化させる存在で、その宇宙に内在する人間は認識活動をすることができて知識を拡大している、と明らかにしている。

そういう物質的宇宙に、生命のない物質とはあり方の異なる生物または人類が存在して認識活動を行なうので、人間は、そのことを表わす概念として「世界」という言葉を昔から用いてきた。それに対抗して「三世界」を構想する認識論は、はじめから見込みのうすい挑戦だったのである。

最後に、カントが提起してそれ以後も鍛えられてきた認識論を対照させておこう。本文で論じたように、カントの認識論は、体系全体の構成まで熟慮した上で、公準となる「認識の構え」を先頭において、自己無撞着な体系をめざしたものであった。その認識論が基本的に成功した理論であることは、次の世代のハイネやニーチェが衝撃を受けながらも肯定し、

カント以後の哲学者たちがカントの認識論に取って代わる認識論を提出していないことに表われている。

この考察では、カントの認識論を自然科学の成果と合体して整合的で強固なものにまとめようとした。その科学的認識論は、物質的存在と生物の認識活動のある世界を、対象とそれを認識しようとする人間がいる一つの統合的世界とする。この構えに反して三つの世界を鼎立させるのは、科学的認識論の問題空間の外に飛び出る挑戦となる。すでに述べたように、それは「理性の超越」である。ポパーの挑戦は成功しなかった、とわたしは考える。

まだ議論を続けることができるだろうが、これ以上言いつのると理性に載せられて暴走しかねないのでやめにしよう。

(b) ローレンツの進化論的認識論について

動物行動学者 K. ローレンツは、進化論的認識論の提唱者の一人と見なされている。著書『鏡の背面』しか読んでいないので、その進化論的認識論を適切に批判する力がわたしにはないけれども、『鏡の背面』を読んで考えたことを記し、進化論的認識論と伝統哲学的な認識論の対立について初歩的な考察を試みることは有用だろう。

著書『鏡の背面』は、冒頭に「認識論的プロレゴメナ」と題する四節から成る「前置き」を置いて、カントを意識して

いることを表現する。その第一節「課題設定」は、「もしわれわれの研究がおよそ一つの意味をもつはずのものであるならば、われわれが研究しようと欲するものの現実的存在が自明のこととして前提されるべきである」という公準と、生物学的に考える人には自明のものに見える認識論上の見解「すべての人間的認識は、どこまでも現実的で活動的な生きたシステムおよび認識する主体としての人間が、彼の認識の対象たる、同様に現実的な外界の事実と相互に作用しあう過程に基礎づけられている」を前提することで始まる。

ところが、ローレンツは精神科学的な思想家たちが受け入れないことを知っている。その対立が生じるのはなぜだろうか。思考の原点に立ち返って考えてみよう。

ローレンツの公準と前提には、研究・現実的存在・生物学・現実的で活動的な生きたシステムなどの言葉と、「認識主体の人間が認識対象たる外界の事実と相互作用しあう」という文がある。自然科学者はこれらの言葉と文章が適切でないと考えることはまずないだろう。ところが、広く哲学は、公準や前提そのものが妥当であるかどうかまで考察することを習いとしてきた。それに対して、ローレンツは、前段落の「」のなかの命題を公準・前提とすることができるかどうかについては議論していない。現代のたいていの自然科学者もそういう問いをあらためて考察することはないだろう。その点に、伝統的な哲学およびそれを受け継ぐ精神科学の学徒と、ロー

レンツとその後継者である進化論的認識論者とのあいだで、議論がかみ合わない理由がある。両者はそのことを明確に自覚していないので、いつまでも議論がすれちがうのだ、とわたしは考える。

わたしに言わせれば、多くの自然科学者は、自然科学の研究がカントの認識論を土台としてなされる営為であること、自然科学的な認識がカントの認識論の枠組みの中で得られることに無自覚である。そのことに無自覚なまま進化論的認識論を展開すれば、哲学を諸学の基礎と考える伝統的な哲学者とそれを受け継ぐ精神科学的な思想家たちが、反論または抵抗を示すのは予想できることである。逆に、後者も、前者が公準・前提とする命題そのものがどこまで妥当か真剣に検討することをおろそかにしている、と言える。

ところが、IX節までで試みたわれわれの科学的認識論は、自然科学の成果によってカントの認識論の構成と内容を修正し、逆にその修正された認識論に基づいて科学的知見を開拓していくという循環的な認識論である。一見わずかな姿勢の差にしか見えないだろうが、無撞着な認識を追究するというカントの「認識論の構えと形式」を維持することは、学的研究にとって重要で欠かせない。こういう科学的認識論なら、伝統的な思考をする哲学者に対抗できる理論枠組みとなることを以下に論じよう。

認識論は、思考はどのような条件のもとでどのようにしてどこまでできるか…と考察して、人間の思考を解明して基礎づける理論である。そのような思考の解明があってはじめて、しっかりした哲学的思考が可能になるのである。

第0節で、ユークリッド幾何学やニュートン力学の体系を調べて、思考がつくり出す学的体系がどのような枠組みを構成すべきであるかを確認した。それは、公理と呼べる反証の困難な命題を発見し、その公理から可能なら演繹的に導くことができる命題だけを提示して体系を構成する、というものである。続く章で、さまざまな角度から考察して、カントの認識論がそういう「構え」の体系をめざしていることを明らかにした。哲学も、一定の体系的な論を立てるのなら、そのような議論の仕方をしなければならない。

学的体系は、ユークリッド幾何学に倣って、思考しようとする“空間”を無限定なままにしてはならない。また、思考の対象が経験的な存在物である場合、ニュートン力学がそうであるように、その対象がどういうものか一定の規定をし、そのあり方に枠をはめる境界条件あるいは拘束条件を付与すべきであろう。

まず、数学者は哲学的な思考もする人であったが、ユークリッド幾何学のような数学は、実質的には哲学に依拠することなしに組み立てられたことを指摘しておこう（非ユークリッド幾何学でも同じことである）。数学以外について、哲学

者は、形而上学のほかに形而下の自然哲学も考察してきたが、その伝統の枠組みを固守して思考する哲学者は、自然を対象として思考するとき、「経験的な存在物」と言うことさえ、素朴実在論と呼んで退けようとする。

「経験できる存在物は実在する」と言う常識人を素朴実在論だと退けることが今でも意味をもつのか、常識的な意見を言うておこう。哲学の学界で議論するときは素朴実在論を批判する哲学者も、生死にかかわる病巣が見つかったとき現代医学が可能で最善と勧める外科手術を受けるだろう。その場合、その哲学者が伝統哲学の身心論や素朴実在論批判よりも自然科学としての現代医学の言説を選択したことは明らかである。その経験を真剣に受けとめて、哲学の場にもどったとき、自然科学の土台をつくる認識論とその基礎の上に築かれる自然科学を真剣に考察すべきだ、と思う。たとえ、科学的認識論は真である保証をもたず、自然科学の提出する理解と説明がまだ経験的に誤りであることが示されていないだけだとしても。この考えは、そのように生きるほかない常人の素朴経験論にすぎないけれど。

ここから推測できることは、伝統的哲学が形而下の学において、思考空間を無限定なままにするだけでなく、経験できる対象を無規定のまま思考を開始し、秩序だった考察ができるように拘束条件を課すこともない、ということである。しかし、のっぺらぼうな無限定な思考空間で、無規定な対象を考察すれば、議論は人それぞれに異なる結論に到達し、確実

な成果を上げることはできないだろう。

他方の自然科学者は、ほとんど無自覚のまま、ニュートン力学以来の方法に沿って、限定された思考空間で一定程度規定された対象を研究する。つまり、両者は、異なる問題空間で思考しているのである。だから、伝統的哲学者と自然科学者の議論はかみ合わない。

カントは、この問題を克服するために、認識において思考はどうあるべきかの指針を伴う認識論を提起した、と言うことができる。

本文で議論したように、カントが発見した認識の構えは、思考の無制限な展開を統整して、論理的に自己無撞着な思考空間に閉じるようにする。すなわち、われわれを拘束条件のある思考空間から超越しないようにするのである。それは、公理から出発して構成される幾何学やニュートン力学の論理空間に当たる思考空間を設定しようとしているのだ。

こう考えれば、本稿がめざした科学的認識論がさらに精緻になれば、それに基づく自然科学的研究を哲学者が無視できなくなる、と期待することができる。

＊

最後に、ローレンツの著書『鏡の背面』について、一言感想をつけ加えよう。その意欲的な著書は、進化論的な認識論の考え方を概説し、それに基づいて動物の認知に関する研

究成果に言及し、さらに生物の文化的行動を人間の精神や文化にまでつなげて、それら三つを縦断的に論じている。わたしは、ここまでの議論にしたがって、第一の科学的認識論については基礎づけの議論をさらに続けるべきである、と考える。個別科学である第二のテーマ動物行動学あるいは最近の進化論的認知論も、認識論に追加できるほどの知識を得るためには、さらなる研究の進展が必要だろう。第三の文化論は自然科学的な材料に基づいているとはいえ、重要な部分が人文学に属すると考えるべきだろう。そうだとすると、現在のところ、人文学でまとめた文化論を立てるのは困難な仕事であることを考えざるをえない。ローレンツの文化論は傾聴に値するが、まだ構想の段階を抜けきっていないのではないだろうか。

あとがき

ずいぶん背伸びをして認識論と科学を融合させる試みをしてきた。それは、哲学者が哲学を“諸科学の王”と主張しながら、逆に諸科学の有用な知見によって乱されるのを嫌っていることに疑問を感じるからである。人間の認識は、本姓上、生活にかかわるすべてのことに向かおうとする。だから、認識論は伝統的な哲学が領分としてきた思弁の範囲だけにとどまることができない。カントは、そのことに気づいて革新的な認識論を構成し、人間の思考に新しい視界を開いた。それ以来、実際に確実な知識を広げてきた科学が認識理論の内容を豊富にしてきた、と思う。

古来人間は、「世界はどのようなものか、わたしはどのように生きているか」という問いを生きてきた。認識論は、その問いの前半部を尋ねる営みであるが、切り離せないものとして後半部の問いがある。古来の賢人の探求がわたしに多くの示唆をあたえてくれるものの、賢人たちはまた、上の問いに簡単に答えることができないことも教える。カントが指し示した道をたどったこの拙い思索も、わたしが上の問いを一步一步尋ねていくことしかできないことを示している。

このあとがきでわたしは感想を語ることしかできない。短絡かもしれないが、わたしは、カントと似た心性をもっていた先人としてゴータマ・シッダールタを思い浮かべる。聖化される前のゴータマは、世界と人間について探求を重ね、ど

のように生きるかを問いつめて、到達したことを人々に説いたのだ、と思う。その教説は、本当のところはカントの哲学と同質なものだったのではないか。

道元の『正法眼蔵』は圧倒的な迫力で問いに迫るけれども、ゴータマが到達した「ゴータマの法」の内容を語ることはできていない。先の問いはそのような性質の問いである、つまり、内容のある答えを出すことは困難だし、一気に答えとなる「悟り」に到達することもできない、ということだろう。道元が追求する「ゴータマの道」をわたしに可能なやり方で言葉に表現すれば次のようになる。道はいつも到達への途上にあり、人間にできることは、今ここで世界と人間を把握しよい生き方を決定するさい、最善の判断を下すことである。その判断が適切ならそれが“悟り”であり、その悟りはよい生き方をするための姿勢や態度を生み出す、と。

カントが礎を据えた認識論を現代的に充実させることを試みたが、すでに知られていることの羅列に過ぎないと言われるだろう。そうだけれども寡聞なわたしは、人間の認識について、ここでしたように関連づけた議論をあまり聞かないように思う。今のわたしにできることは、自分なりにたどりついたこのような観点から世界に向き合って生きることである。なんとかやりおおせるだろうか？